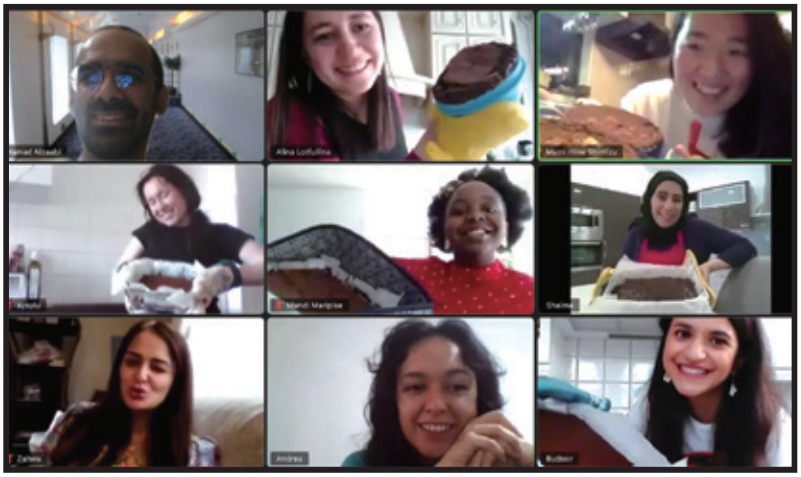


内閣府青年国際交流事業はあなたの飛躍を応援します！

内閣府青年国際交流事業
事後活動ニュース

内閣府
FY 2020-2021

CONTENTS

1　内閣府青年国際交流事業　事後活動について

【IYEO会員個人の活動】

3　元内閣官房副長官、総務副大臣　大野松茂さん

4　長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授
公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン理事長
池上清子さん

5　【祝】令和2年春及び令和3年秋の叙勲

6　ASEANユース・ボランティア・プログラム2021

【IYEO会員グループの活動】

7　東日本大震災10年を振り返る

9　IYEO防災フォーラム開催報告

10　IYEOパラスポーツ振興チーム

11　体験記の出版プロジェクト

12　グローカルリーダー創出プロジェクト（GLDP）

13　One More Child Goes To School Project

【IYEOの活動】

14　茨城県青年国際交流機構

15　青少年国際交流事業事後活動推進大会

16　青少年国際交流を考える集い（ブロックイベント）

17　IYEO未来創造会議

【国際的な活動】

19　SSEAYPインターナショナル（SI）各国の活動

21　SWYAA各国の活動

22　中華人民共和国日本国大使館との連携

23　中国派遣団同窓会／日韓交流連絡会議

内閣府青年国際交流事業

事後活動について

1. 事後活動とは

内閣府青年国際交流事業に参加した青年（既参加青年）には、事業に参加して得た経験をその場限りのものとせず、事業参加後の活動に結びつけ、広げていくことが期待されています。実際に、多くの既参加青年たちが、事業参加後もその属する地域や職域など社会の各分野において、事業参加によって得た知識や経験、人脈をいかして、国際交流活動や青少年育成活動などの社会貢献活動に取り組んでいます。内閣府では、事業で得た学びを広く地域社会や国際社会に還元することを目的にした社会貢献活動を「事後活動」と呼び、既参加青年の活動を支援しています。

2. 事後活動を支える日本青年国際交流機構（IYEO）と世界的な人的ネットワーク

日本青年国際交流機構（IYEO：International Youth Exchange Organization of Japan）は、この「事後活動」に取り組む既参加青年の全国的組織として、1985年に設立されました。2021年度は「共生社会の実現に向けて、生きる力を発揮しよう」をその活動方針とし、47都道府県に支部を置きながら地域に根差した国際交流活動や青少年育成活動、大規模災害への支援など、その豊富な人材とネットワークを駆使して、様々な活動に継続的に取り組んでいます。

また、海外においても、40を超える国々で外国人参加青年の事後活動組織が設立され、各国独自の社会貢献活動が行われています。こうした事後活動を支えるネットワークの下、既参加青年は、同じ関心を持った青年と世代、地域、国を超えてつながることができるほか、熱意やアイデア次第で取り組みたい活動をすることができます。

なお、これら事後活動組織による活動はもちろんのこと、既参加青年一人一人が自身の社会活動などにおいて、事業参加によって得たものをそれぞれのやり方で社会に還元することもまた「事後活動」です。

3. 内閣府青年国際交流事業　事後活動ニュースFY2020-2021

本事後活動ニュースFY2020-2021は、既参加青年が各々の住む地域や職域等で取り組んだ事後活動の一部を主に紹介するものです。

（1）IYEO会員個人の活動

本事業の参加によって得られた経験や学びを自身のキャリア形成にいかし、現在、国際協力活動やビジネスの第一線で活躍している既参加青年を始め、各国政府や国際機関などの要請に基づき、IYEOの推薦により国際会議やフォーラムに参加した既参加青年たちを紹介します。

（2）IYEO会員グループの活動

IYEO会員は、各地域、職域、学校、青少年団体等で様々な活動を行っています。ここでは、IYEO会員が自主的にチームを結成し、パラスポーツ大会や国際協力活動などの社会貢献活動をしている事例を紹介します。

（3）IYEOの活動

都道府県IYEO独自の国際交流・地域貢献プログラムに加え、定期的な集まりとして各地域での事後活動の進捗状況を報告・意見交換を行い、国際交流活動を一般の方にも紹介する推進大会・ブロックイベント（青少年国際交流を考える集い）の事例と、2021年にこれからのIYEO活動のあるべき姿を提言するため創設された「IYEO未来創造会議」を紹介します。

（4）国際的な活動

約60年の長い歴史の中で培われた世界的な人的ネットワークとして、「東南アジア青年の船」事業事後活動組織（SSEAYP International）及び「世界青年の船」事業事後活動組織SWYAA (Ship for World Youth Alumni Association)の活動報告に加え、日本・中国青年親善交流事業及び日本・韓国青年親善交流事業の開催内容を紹介します。

【IYEO会員個人の活動】 元 内閣官房副長官、総務副大臣

安倍・福田内閣で内閣官房副長官、総務副大臣を務められ、現在は、狭山市名誉市民、西武文理大学特命教授であられる大野松茂先生は、1962年、26歳の時に当時の総理府（現在の内閣府）が主催する第4回日本青年海外派遣事業（東南アジア第2班）に参加されました。

狭山市名誉市民、西武文理大学特命教授
大野松茂さん
第4回日本青年海外派遣事業 東南アジア第2班（1962年）

特に印象的だった出来事を教えてください。

派遣前の研修で「この財政厳しい折に皆さんを海外に派遣するのですから、決して、無駄に物事を見ないように。」と指導されたことを覚えています。そのため、派遣先では、視察などのプログラムはもちろん、移動中のバスに乗っている時も必死になって外の景色を見ながら、現地の生活様式などを観察し、見たもの全てを吸収しようと一生懸命になっておりました。そうやって集中して観察していると、民家の軒先に干してある洗濯物が目につきます。干してあるものは非常に質素で暮らしの貧しさを感じさせるもので、これまで当り前だと思っていた日本の生活が実は恵まれていたのだということに気づかされました。決して、無駄に物事を見ないように意識すると、確かに目に入る一つ一つが自分にとって学びになります。そのため、当時の名残で、60年たった今でもいまだに乗り物に乗っている時に居眠りなんかできませんよ。

日本を代表するという体験

戦後の東南アジアを訪問するわけですから、もしかすると日本人だということで石を投げつけられるのではないかと覚悟すらしていたんです。ところが、私たち派遣団は行く先々で大歓迎を受け、あちこちで感謝の言葉をいただきました。カンボジアでは「日本のおかげで教育の機会を与えていただいた。」、「日本の方々は、数を数えるとか、文字の大切さを教えてくださった。」とお礼を言われることさえあったんです。こうした経験を通じて、実は、日本という国は世界で高く評価されていたんだということを初めて知り、これまでの歴史認識が一変しました。加えて、自分が日本を代表する青年として外国の方とやりとりする中で、日本人としての誇りや意識が芽生えたような気がします。

どの訪問国にもそれぞれ思い出がありますが、カンボジアは熱心な小乗仏教の国で、貧しい中にも明るく、建国の意欲がみなぎっている印象的な国でした。農業関連の視察の際に、日本で使っている農薬について話したところ、虫を殺すことにも抵抗を感じるようでした。そんな心優しいカンボジア人の国でポル・ポト派によって大虐殺が行われ、国の信頼を失ってしまったのは本当に残念なことでした。政治が安定していなければ、国の発展がないということを痛感し、政治の道を志そうと思った出来事でした。

今は、お金さえあれば、世界中どこにでも行けるという時代です。そのような中で、国が実施する国際交流事業に参加する意義は何かというと、それは日本を代表するという経験です。国が送り出してくれるのです。単なる旅行ではあり得ないような経験ができるからこそ、事業に参加する皆さんには、その重みを改めて自覚し、多くを学んできてほしいと思います。

【IYEO会員個人の活動】

長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授
公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン理事長

長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授、公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン理事長の池上清子さんは、1974年、大学生の時に第1回「東南アジア青年の船」事業に参加されました。船での体験はその後のキャリアに影響を与え、一貫して、開発途上国の女性の健康推進、自立支援に携わってこられました。

長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授
公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン理事長
池上清子さん
第1回「東南アジア青年の船」事業（1974年）

人とどのように関わるべきかを学ぶ

若いころの経験は、その後の人生を大きく左右します。私にとって、二つのイベントは、70歳になる今でも、その影響を感じることがあります。一つ目は高校生の時にAFSを通してアメリカに留学したこと、二つ目は大学生の時に第1回「東南アジア青年の船」事業に参加したことです。

「東南アジア青年の船」事業では、船という逃げ場がない環境下で、どのように人と関わるべきかを学んだと思います。船内では、あの人と話したくないとか、この人とは会いたくないからといってずっと部屋に籠もっているわけにはいきません。相手を変えることはできませんから、自分の考え方や行動を変えていくしかありません。どうしたら一緒にやっていけるのか、どうやって折り合いをつけていくのかを、参加青年一人一人が学びました。逃げ場がないというのはネガティブな意味ではなく、今の現実の社会の中でもどのような人間関係を構築できるかということと共通していると感じています。

誰一人取り残されない社会を作る

タイのバンコクに参集したとき、当時のバンコクで一番良いホテルに泊まりました。首都の立派な通りにあるホテルなのに、ホテルの前に水たまりがたくさんできていて、路上生活者の子供たちが水遊びをしていました。この光景を見て、日本はこういう段階をもう脱したのだなと思いました。同時に、これから日本がするべきことは、このような路上生活をせざるを得ないような家族、つまり社会から取り残されやすい人に対して何ができるかをタイの人と一緒に考えることではないかと気づいたのです。私がやるべきことは、今のSDGsでも言われているように、誰一人取り残されない社会を作っていくことなのだなと思ったのを覚えています。

発展途上の国は、これからこういう国にしよう、上を目指そうというエネルギーに満ちています。一方で、ある程度発展した国は、上を見るというよりは後ろに取り残されている人がいないかどうか、みんなで一緒に歩んでいけるかどうかを見なければいけないのではないでしょうか。前を見るだけが大切なのではなく、時には後ろも振り返って、自分たちよりも遅れている人がいれば、なぜ遅れているのか、その人たちのために何ができるのか、一緒に何をすればよいのかを考える必要があります。

今でも私の心の中に残っているのは、この船の事業に参加して、海外の青年と共に暮らし、意見交換などを通して、普段はあまり考えもしないこと、つまり、自分って何？とか、日本という国は海外からどのように見られているのだろうかといった点を深く考えさせられたことです。

この思いは、大学院を卒業して就職する時の進路決定に大きく作用しました。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に職を得たのも、世界から貧困をなくし、格差是正に寄与するような仕事に就きたいと考えたからです。私はこれまで、日本のNGOや国際NGOでも仕事をしてきましたが、国際協力を通じて、女性の人権を守ったり、欲しい時に子どもを出産したりできるように情報とサービスを提供してきました。特に、国連人口基金（UNFPA）では、小さいながらも、東京事務所のトップとして、責任が重い仕事を任されました。その後、母の介護のため国連を早期退職して、現在は大学で教えています。

【祝】令和２年春及び令和３年秋の叙勲

令和２年春の外国人叙勲において第２回「東南アジア青年の船」事業のタイ既参加青年であるウィスィット・デッカムトーン氏（Mr. Visit Dejkumtorn）が、そして、令和３年秋の外国人叙勲において、第10回「東南アジア青年の船」事業のインドネシア既参加青年であるリノ・ウィチャクソノ氏（Dr. Rino Wicaksono）が、日本とタイ・インドネシアを始めとするASEAN各国との間の青年交流及び友好親善に寄与した功労を讃えられ、旭日双光章を受章されました。

「東南アジア青年の船」事業外国人参加者の旭日双光章受章は、マレーシアのトゥアン・ハジ・モハメド・アウズィ・ビン・ダウド氏（Tuan Haji Mohamed Auzi Bin Daud）（平成19年春の外国人叙勲）に続いて、合計３名となりました。

ウィスィット・デッカムトーンさん

第2回「東南アジア青年の船」事業（1975年）

ウィスィット・デッカムトーン氏は、1975年に第２回「東南アジア青年の船」事業タイ参加青年として参加した後、1988～1992年に「東南アジア青年の船」事業のタイにおける事後活動組織ASSEAY Thailand会長を務めました。現在は、ASSEAY Thailand顧問を務めています。

1991年には、自身のネットワークを活かして非営利団体ファンド・フォー・フレンズ（Fund for Friends: FFF）を設立し、「希望あふれる子供たちのためのプロジェクト（For Hopeful Children Project: FHCP）」を立ち上げました。このプロジェクトでは、孤児や難民、山岳少数民族、障害を持っている子供たちなど、社会的困難を抱える子供たちを「希望あふれる子供たち（Hopeful Children）」と呼び、タイ全国各地の「希望あふれる子供たち」を招いて、海水浴などの活動を含む宿泊型キャンプを行います。プロジェクトの立ち上げ以来、現在まで30年にわたり毎年実施され、現在では、タイだけでなく、日本や東南アジア各国からも多くの子供たちやボランティアが集まり、参加者総勢1,000名を超える一大プロジェクトとなっています。日本からは、2008年から毎年、（一財）青少年国際交流推進センターが実施するタイ王国・スタディツアーの参加者（大学生及び社会人）が、FHCPのボランティア・スタッフとして現地の実行委員と協働しながら、日本とタイの友好関係や連携強化に加わっています。

「希望あふれる子供たちのためのプロジェクト（FHCP）」のポスター

ウィスィット・デッカムトーン氏は、長年にわたる日本・タイ間及び世界各国との青年交流の促進に寄与した実績が認められ、2004年にはSSEAYPインターナショナル賞（SSEAYP International Award）、2013年にはタイ政府社会開発・人間安全保障省による社会的弱者の子供たちの活動への表彰制度プラチャーボーディ賞（Prachabordi Award）を受賞されています。

リノ・ウィチャクソノさん

第10回「東南アジア青年の船」事業（1983年）

リノ・ウィチャクソノ氏は、1983年に第10回「東南アジア青年の船」事業インドネシア参加青年として参加した後、「東南アジア青年の船」事業のインドネシアにおける事後活動組織（現在のSSEAYPインターナショナル・インドネシア）の立ち上げに尽力し、1987～2013年にSSEAYPインターナショナル・インドネシア会長を務めました。現在は、SSEAYPインターナショナル・インドネシア評議員会会長を務めています。

2007～2012年には、日本に関する情報を東南アジアへ伝え、日本とASEAN各国との交流を促進することを目的として、インドネシア・ジャカルタでの「JASEAN（日・ASEAN）フェスティバル」の開催や、雑誌『JASEANマガジン』の発刊に取り組みました。フェスティバルや雑誌を通じて、多くの子どもたちが日本文化（漫画やアニメ、キャラクター、コスプレなど）に親しみ、また、大学生が日本留学や奨学金に関する情報を得ることができました。

リノ・ウィチャクソノ氏（中央）とご家族

リノ・ウィチャクソノ氏は、長年にわたる日本・インドネシア間及び世界各国との青年交流の促進に寄与した実績が認められ、2000年にはSSEAYPインターナショナル賞（SSEAYP International Award）を受賞されています。

ASEAN YOUTH VOLUNTEER PROGRAMME (e-AYVP) 2021

2021年8月30日（月）～ 9月17日（金）、「e-ASEANユース・ボランティア・プログラム2021」がオンラインで開催され、「ASEANにおける今後の教育システムの強化」をテーマに青年が地域社会とともにどのように役割を果たしていくべきか議論されました。

ASEAN事務局より日本代表者の推薦依頼があり、日本青年国際交流機構（IYEO）から1名が出席しました。以下に参加報告書の一部を掲載します。

長瀬智寛さん
「世界青年の船」事業（2017年）

未来のASEANは、若者と若者の対話によって創られる

本プログラムのオープニングセレモニーは、「未来のASEANは、エリートや政治家や外交官ではなく、人と人とのつながり、若者と若者の対話によって創られる」という参加者を鼓舞する言葉から始まった。ASEAN＋3から集まった約300名の参加者が、これからのASEANを創る当事者であり主役であると改めて認識し、私もこのプログラムに臨んだ。

本プログラムは「ASEANにおける今後の教育システムの強化」をテーマに講演・ワークショップが実施され、各国のCOVID-19の感染状況や教育現場における感染症対策事例などが紹介された。現場にいる当事者のリアルな声が聞ける貴重な機会であり、プログラムを通じて新たに得られた気づきとして以下の2点がある。

1点目は、クライシス・コミュニケーションについてである。これらは、危機的状況に直面した場合に、その被害を最小限に抑えるために行うもので、情報開示を基本としたコミュニケーション活動を意味する。

講演では、COVID-19という不測の事態に対して、教育に関わる多種多様なステークホルダーへの迅速かつ適切なクライシス・コミュニケーションが求められているとされた。

2点目は、コロナ禍により、教育現場ではテクノロジーやICT機器の活用が促された結果、教育提供者の役割が変わってきているという意見が示されたことである。今後、急速に変化と適応を繰り返していく社会において、教育提供者はその社会状況に合わせて自らの「役割」を変え、果たし続けていくしかないと強調されていた。

地球市民として、よりよい暮らしを送り続けるためには

本プログラムを通じ、COVID-19がもたらした現在の世界が我々人類に与えているのは、単に目に見える健康被害だけでなく、教育、経済、福祉などの基盤となる人間の尊厳に気づくきっかけであったと考えさせられた。参加者が一貫して問われていたのは、「どのように参加者が地球市民として、よりよい暮らしを送り続けることができるのか」ということであり、それを受けて私は、どの分野でも誰も取り残さず、よりよい暮らしを創っていくために、本プログラムで学んだスキルや考え方を環境に合わせて活用していきたいと思う。

また、直面している場面に合わせて技術や方法にアレンジを加えて、試行錯誤しながら活用するだけでなく、変わりゆく現状や政策に合わせ、我々のマインドセットも常にアップデートし続けることが教育現場に携わる我々のニューノーマルであると改めて実感した。

【IYEO会員グループの活動】 東日本大震災10年を振り返る

未曾有の災害と言われた東日本大震災の発生から10年が経過しました。震災は東北の沿岸部を中心に大きな被害をもたらしましたが、様々な支援を受けながら復興へ向けて歩みが進められています。IYEOも被災県を中心として、国内外のネットワークを活用しながら、復興支援活動に取り組んできました。発災後すぐの炊き出しや清掃活動等の直接的な支援から、現在は震災の経験をどのように地域防災につなげるかといった観点の講演活動を行うなど被災地に寄り添いながら、この10年間支援活動を続けています。今回は主に岩手県、宮城県、福島県の主な活動を振り返ります。

岩手県青年国際交流機構

2011年	・避難所での炊き出しや被災住居等の清掃活動等 ・株式会社商船三井主催の「ふじ丸」を利用して被災者に食事、入浴等のデイユースサービスを無償提供するプログラムの現地サポートスタッフとして15名以上の会員が協力 ・山田町の水産加工場の清掃を実施 ・「IYEO縁側カフェ」（20回実施） ・田野畑村応援バスツアーの企画運営
2012年	・「IYEO縁側カフェ」（7回実施） ・復興祈願を目的とした地域のイベントや活動への協力（北山崎しゃくなげ祭等） ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を1か所で実施） ・第25回「世界青年の船」事業　大船渡市、陸前高田市での寄港地活動に協力 ・SIGA Japan SCAの受け入れによる被災地活動
2013年	・「IYEO縁側カフェ」（11回実施） ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を2か所で実施） ・「震災復興支援活動がつなげる雪国いわて西和賀と世界～西和賀雪っ子プロジェクト」
2014年	・「IYEO縁側カフェ」（7回実施） ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を5か所で実施） ・「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」（SWY2014）大船渡寄港地活動に協力
2015年	・「IYEO縁側カフェ」（10回実施、メディアにも取り上げられる） ・新潟県IYEO×東北（福島・宮城・岩手）チューリップ花絵大作戦 ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を2か所で実施） ・VISITとうほくの受け入れによる被災地活動
2016年	・新潟県IYEOとチューリップ花絵大作戦 ・「IYEO縁側カフェ」（3回実施） ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を1か所で実施）
2017年	・新潟県IYEOとチューリップ花絵大作戦 ・詩人桑原滝弥、講談師・神田京子 夫婦幸福ライブ ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を3か所で実施）
2018年	・「IYEO縁側カフェ」 ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会、中村雅人さん講演会を4か所で実施）
2019年	・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会、中村雅人さん講演会を4か所で実施）
2020年	・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を1か所で実施）

IYEO縁側カフェ

宮城青年国際交流機構

2011年	・塩竈市浦戸諸島桂島支援（物資支援、避難所でのイベント、地域の夏祭り等の支援） ・女川町立女川第二小学校避難所支援（物資支援：長靴、Tシャツ等） ・「石巻市立病院」医療従事者の継続的な生活支援・物資支援（日用品、食品、毛布、衣類等） ・リラックス&リフレッシュ1泊2日温泉ツアー（山形県IYEOと協働で企画、計3回実施）

2012年	・塩竈市浦戸諸島桂島支援（北海道・東北ブロック大会開催） ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を1か所で実施） ・H22年度「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」ドイツ既参加青年の訪問受入れ ・「石巻市立病院」医療従事者への物資支援（PCを支援）
2013年	・「東南アジア青年の船」事業地方プログラムへの協力 （亘理町公共ゾーン仮設住宅でのASEAN交流） ・「グローバルリーダー育成」事業寄港地活動への協力（石巻での視察受入れ） ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を5か所で開催）
2014年	・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を7か所で実施）
2015年	・新潟県IYEO×東北（福島・宮城・岩手）チューリップ花絵大作戦 ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を3か所で実施）
2016年	・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を2か所で実施）
2017年	・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を2か所で実施）
2018年	・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を3か所で実施）
2019年	・石巻市立蛇田小学校　スクールミシン８台寄贈
2020年	・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を3か所で実施）

チャリティー・トークイベント
（坂本達さん講演会）

船と翼の会ふくしま

2011年	・NPO法人ザ･ピープル（いわき市）を通じた支援 ・あづま運動総合公園内避難所（福島市）での炊き出し ・学用品の提供 ・「復興の黄色いぞうきん」プロジェクト ・国際理解キャラバン隊（福島市立大森小学校、福島市立渡利小学校、福島大学にて実施）
2012年	・復興支援雑巾プロジェクト ・国際教育キャラバン隊（小学生を対象に実施） ・ボランティア勉強会 ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を1か所で実施）
2013年	・復興支援雑巾プロジェクト ・「原発事故直後の福島」を考えるワークショップの実践 ・北海道・東北ブロック大会の実施（福島市） ・「東南アジア青年の船」事業地方プログラムへの協力 （日本・アセアン青年交流プログラム及びホームステイ） ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を1か所で実施）
2014年	・「福島の家族会議After 3.11」（震災をテーマにしたワークショップ）の開発と実践 ・チューリップ大作戦@ふくしま×にいがた ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を3か所で実施）
2015年	・新潟×東北（福島・宮城・岩手）チューリップ花絵大作戦
2016年	・チューリップ大作戦@ふくしま×にいがた ・チャリティー・トークイベント（坂本達さん講演会を2か所で実施）
2017年	・チューリップ大作戦@ふくしま×にいがた
2018年	・チューリップ大作戦@ふくしま×にいがた（開催に向けて準備していたものの、チューリップの開花が予定より大幅に早かったため、開催中止）
2020年	・ブロックイベント「葛藤をこえた人のつながり～ローカルとグローバルの視点から多様な価値観を考える～」で、震災をテーマにしたワークショップと講演を開催

復興の黄色いぞうきんを縫う

【IYEO会員グループの活動】 IYEO防災フォーラム開催報告

2011年に発生した東日本大震災から10年の節目に、２年がかりで進めてきた防災フォーラム。「被災地」東北三県は、震災直後から全国・世界のIYEO関係者の皆さまから多大なるご支援をいただき、活動を続けています。各県の強みを活かした復興支援活動を通し、今だからこそ伝えたいと、12月19 日、岩手県・宮城県共催でオンライと現地開催のハイブリッド形式にてIYEO防災フォーラムをようやく実現させました。

宮城IYEO

宮城IYEOは、東松島市出身で大学生の武山ひかるさんの講演会を行いました。武山さんとの出会いは、坂本達さんの講演を石巻市立桜坂高校で実施したことがきっかけです。震災当時、小学校４年生だった武山さんは、高校生語り部として当時の安倍総理にも自身の被災経験をお話ししたり、家族を亡くした友人の話を絵本で出版したりするなど積極的に被災経験を伝える活動を行っています。講演では、災害時の子供から見た大人の姿や、大人の子供への接し方など、子供の心の変化について実体験をお聞かせいただくとともに、「子供は大人をよく観ている、大切なのは子供にも役割を与えてほしいということ。」という思いを伝えていただきました。宮城IYEOとしても、被災当事者のお話を伺う機会を持てたことに加えて、IYEO防災フォーラムという場で、武山さんのような若い世代の活躍を伝えられたことが何より嬉しかったです。

岩手県IYEO

岩手県IYEOは、東日本大震災の発生以降、256日に及ぶ支援活動で1,922人がボランティアとして18,495人の被災者に関わることができました。直接的な支援活動からスタートしましたが、縁側カフェや岩手県の伝統芸能さんさ踊りなど、個々の会員の強みや思いが被災地支援活動に反映され継続的な活動の充実につながっています。そこに全国の会員も加わり、更に充実した活動となりました。IYEO会員は幅広い視野と各地の課題に対する共感力を持ち合わせています。そうした共感力をいかしながら、活動の受け皿としての役割を担うことで、活動促進につなげました。こうした想いのサイクルが生まれる場となったことは、関わった者として嬉しく感じています。

10年の活動の中で生まれたつながりを通じて、防災意識の醸成や支援活動のあり方など、少しでも皆さんにお返しすることができたのであれば幸いです。今後も被災地で活動を続けてきた団体としてメッセージを発信したいと思います。

IYEO防災フォーラム参加者の感想

- 武山さんの言葉は胸に迫るものがあった。同世代で今度は実践していく立場にあり、前に進み続ける姿に勇気をいただいた。
- 自分は教員であるが、熊本地震で避難所対応を経験し、「子供にも役割を与える」というお話に強く共感。未来を担う子供たちが置き去りにならないようにしていきたい。
- 岩手の一人一人のスキルを活かす考え方が、会員の居場所や存在意義になっていた。
- 混乱の中、3月19日には岩手県IYEOが支援に動き出し、日頃のネットワーク形成の重要性を感じた。「ボランティアとしての節度と礼儀」という「支援のあり方の指針」が共有されているからこそ、継続的な支援が可能。密にコミュニケーションを取りながら活動の核を作っていくことは都道府県の活動にも通じる。

【IYEO会員グループの活動】IYEOパラスポーツ振興チーム

PARA HEROes展の展示翻訳をサポートする

「IYEOパラスポーツ振興チーム」は、パラスポーツの支援を軸に活動するIYEOのワーキンググループです。アスリートの皆さんが夢を持って輝く一助になるよう、日々活動しています。2020年6月より、東京都に正式に「東京パラスポーツスタッフ」として認定されています。（https://www.sports-tokyo-info.metro.tokyo.lg.jp/staff/detail/38）

ミッションと目的

パラスポーツの振興に向けて、IYEO会員の多様な人材の能力をいかして貢献することを目的とし、IYEOパラスポーツ振興チームは、国境／障害の有無による垣根なき大会の実現のため、次の三つの目的を軸に活動しています。

ミッション
Borderless Olympic & Paralympic

参加する全ての人々が、国籍、障害の有無によって分け隔てられることなく、互いの個性、実力を認め合うことのできる大会を実現すること

目的

1. 大会参加者がスポーツを通じて経験を共有し、国境の垣根を超えて関係を構築する。
2. パラスポーツの認知度/理解度を向上させる。
3. 訪日外国選手/観客の快適な日本滞在をサポートする。

IYEOとパラスポーツのつながり

IYEOとパラスポーツの関係は2021年に東京で開催された大会以前の2015年から続いています。大分県青年国際交流機構（大分県IYEO）の前会長である阿部友輝さんがPTTA（肢体不自由者卓球協会）の理事を務めていたことがきっかけで両団体の交流が始まり、これまでパラ卓球選手の国際大会の出場支援などの活動を行ってきました。

現在の活動

現在IYEOパラスポーツ振興チームでは以下の活動を行っています。

- パラ卓球国際大会の大会要項翻訳
- パラ卓球代表選手への英会話講義
- 2019年パラ卓球日本オープンにおける通訳サポート
- PARA PINGPONG ART PROJECT
  「PARA HEROes展」展示翻訳サポート
- 東京都認定パラスポーツスタッフ交流会への参加
- 2021年、東京で開催された国際的な競技大会でのボランティア（有志メンバー、個人による応募）

ボランティアの所感

- ボランティア活動中にアスリートの試合前後の姿を見ることで、国籍・障害・性別や年齢等を越えて、自分自身を見つめ、時には周りの人と協力して、自分の強みを磨き上げていくことのすばらしさを改めて感じました。この流動的な時代だからこそその姿勢を大切にしていきたいです。（堺澤絢）
- 大会中にたくさんの試合を間近で観戦し、これまでの価値観がガラリと変わり、とても良い経験をさせていただきました。また、ボランティア同士の絆も深まり、新たな出会いに心が踊りました。大会は終わりましたが、今回学んだことや感じたことは、今後も多くの人に伝えていきたいですし、ここでボランティアを終えることなく、パラスポーツボランティアなどを今後も行っていければと思います。（青木玲奈）

【IYEO会員グループの活動】 体験記の出版プロジェクト

令和元年度　地域課題対応人材育成事業「地域コアリーダープログラム」イタリア派遣団

令和元年度の地域課題対応人材育成事業「地域コアリーダープログラム」で障害者分野の団員はイタリアに派遣されました。9泊10日のイタリア派遣では15か所の視察を行いました。小学校やローマ市庁、視覚障害研究所や社会的共同組合などを訪問し、イタリアの障害に対する様々な考えや仕組みを学びました。イタリアから帰国して数か月のうちに、社会は一変しました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、海外への渡航はおろか、日本国内の移動においても、厳しい制限が生じました。

この社会の変化により、私たちが見て、聞いて、体験したことは、貴重な機会であったのだと、より一層感じました。そこで、私たちが学んできたものを共有することが、私たちがすべき第一歩なのではないかと感じました。

出版に向けて

私たちの学びを共有する術として、どんな方法があるかを話し合いました。出版に向け、みんなの気持ちが一致したところで、次に「どこに焦点をあてて書くのか」、「だれを対象に書くのか」、「どうやって本を出すのか」など、話し合うべきことはたくさんありました。イタリアから帰国した後も、3週間に1回の頻度でオンライン会議を重ねました。

クラウドファンディング

出版に向け、各自が担当するテーマの執筆もおおよそが書きあがったころ、出版していただける出版社が決まりました。今回、私たちは共同出版という形での出版のため、費用が必要になり、クラウドファンディングで資金集めを実施することにしました。クラウドファンディングで資金集めをすることに決めた理由として、クラウドファンディングを通して、私たちの活動、本を知っていただけるのではないかと考えたからです。クラウドファンディングでは、多くの方々にご協力、ご支援いただき目標金額を達成、そしてたくさんのご縁ができました。

その後

クラウドファンディングやIYEO自主活動サポート助成金制度（チャレンジファンド）による支援を受け、無事に「イタリアで見つけた共生社会のヒント―フル・インクルーシブ教育に基づく人々の暮らし―」を出版できました。現在、クラウドファンディングのリターンとして、様々な形で報告会や講演をさせていただいております。徐々にではありますが、「輪が広がっている」「繋がっている」ことを実感できる日々です。

冒頭に書いたとおり、出版は私たちの事後活動の第一歩だと思っています。はじめは、イタリアでの学びを共有する目的で出版を考えました。しかし出版を通じ、目の不自由な方が、私たちの本を読むためにはどうすればいいのか？などより実践的な配慮について考えるきっかけにもなりました。イタリア派遣での学びを行動に移し、経験にすることができ、事後活動のすてきな第一歩になったと思っています。この経験を活かし、次の一歩を踏み出したいと考えています。

グローカルリーダー創出プロジェクト(GLDP)

情熱をアクションに変えるための伴走支援

「社会を良い方向に変えたい」という情熱をもった青年が、その思いをアクションに変えられるように伴走支援をするのが、本プロジェクトの目的です。NPO代表、企業人、教師、大学生など様々な人たちで構成されたGLDPチームメンバーが、グローカルリーダー（GL）を選出したのち、約半年間、各人の専門分野をいかしながら、そのGLに必要と思われるワークショップ、ファンドレイズ、プロモーション等の支援をします。GLはワークショップの中で、社会課題に関わる当事者からヒアリングをし、自分自身の思いの原点を確認し、アクションプランを作成し、ビジョン、ミッション、バリューと詳細を何度も練り直したのち、約180か国以上から2000人の若者が集まる世界最大のユースサミットOne Young World(OYW)でプランを発表します。OYWで世界の社会起業家にアドバイスやアイデアをもらった後、アクションプランを再度練り直します。GLがアクションプランを実行し始めたら、GL創出プロジェクトは完了です。

プロジェクト立ち上げの理由

本プロジェクトを起こした理由は、三つあります。一つ目は「社会に貢献したい」と思っている青年に、その情熱を形にするための段階的かつ丁寧な支援をしたかったからです。二つ目は、IYEOメンバーには「誰かのやりたい」を応援する土壌も、各地域で築き上げたネットワークも、青年育成のために自分の持つ専門知識やスキルを無償提供するマインドも、それを通してメンバー自身も成長したいという意欲もあり、社会貢献したい青年を支援するのに最適な環境がすでに揃っていたからです。三つ目は、OYW日本委員とIYEOとの連携の話が入り、IYEOから青年をOYWに送ることが可能になったからです。OYWをGLDPのワークショップの一つと位置付けることで、GLは世界で活躍する社会起業家からアクションプランにアドバイスをもらえるだけではなく、同世代で同じ志をもつ仲間を世界中に持つことができ、それがGLの情熱の炎を燃やし続けると確信したからです。

本年度GLに選出された矢島清香さんは、愛知県を拠点に、多様な文化背景を持つ子どもが活躍できる社会の実現に向けて「にほんご×こころプロジェクト」を始めました。矢島さんは自分自身で教育委員会にヒアリングをしたり、地域のNPO代表や日本YWCA (The Young Women's Christian Association of Japan) の職員の方にアクションプランを話したりしたことで、その人達が新たな人を紹介してくれたりアイデアや場所を提供してくれたりして、少しずつ前進しています。矢島さんは、「GLDPで学んだことはたくさんあるが、GLDPは自分の考えを安心して話せ、困ったらいつでも相談できる場所となった。今度は自分自身が次のGLをサポートしたい」とも語っています。

GLのアクションプラン、はじめの一歩～絵本の読み聞かせ～

一人一人丁寧に伴走するため、私たちが創出できるグローカルリーダーは多くはありませんが、一人のグローカルリーダーが多くの人に良い影響を与えると私達は信じています。その影響がどんどん広がっていくように今後も尽力します。

共催：日本青年国際交流機構／IYEO育成ファンド助成事業

IYEOスリランカ教育支援プロジェクト
～13年のキセキ　キセキの出会い～繋がり～広がり～

プロジェクトの背景

スリランカには、家庭の経済的な問題等で学用品等を購入する充分な資金を得られない子どもたちが数多くおり、そのような子どもたちが継続して学校に通えるように支援することが必要とされています。「世界青年の船」事業の各国の事後活動組織の代表が集まる東京会議から派生し、日本青年国際交流機構（IYEO）の会員によって構成されたプロジェクトチームは、社会貢献活動の一つとしてこのプロジェクトを2008年に開始しました。2008年～2009年は学用品の寄付のみで実施、2010年からは学用品の寄付に加えてフォスターペアレンツ（里親）プロジェクトを開始しました。また、折々にチャリティーイベントを開催し、プロジェクトの状況をお話しするとともに、物販などで得た収益を学校へ寄付しています。

コロナ禍で手探りの支援

新型コロナウイルス感染症のための特別支援の寄付を募り、マスク、消毒液、パンを寄付（2021年4月）

2020年、スリランカで新型コロナウイルス感染症の影響が出始めたのは日本よりも少し後でした。すぐにロックダウンで学校は休校になり、教育現場に大きな影響が出ました。ロックダウンの合間の学校が再開するタイミングで、学校の必要物品を寄付し、児童の絵と手紙も集めることができ、例年に近い支援ができました。スタディツアーは実施できず、プレゼントを子どもたちへ手渡しすることはできませんでしたが、代わりにペアレンツからの手紙を現地に郵送しました。

2021年、感染拡大の影響で学校は再び長期休校となりました。再開しても、感染予防のため学校関係者以外は立ち入ることができず、学校との連絡手段は電話のみでした。4月に新型コロナウイルス感染症に対する特別支援として、マスクと消毒液、パンを寄付しました。特に、子供サイズの不織布マスクは喜ばれました。

長引くロックダウンで所得の低い家庭はさらに困窮し、日々の食事にも困る家庭が出てきました。そのような時、企業から寄付をいただき、9月に食料支援を行いました。配達時の写真は、どの児童もとても嬉しそうで、お米の袋を抱えた満面の笑みの児童もいました。配達後、保護者や児童からコーディネーターに何本も電話が入り、「本当に助かった。日本の皆さんに感謝を伝えてほしい。」との言葉も届きました。

いまだにスリランカの教育現場には制限があり、通常の支援に戻ることができず、ペアレンツの皆さんにはご心配をおかけしていますが、メールマガジンを通じて、現地の情報をお伝えしています。

コロナ禍での支援の広がり

これまでの13年間の活動を評価していただき、2021年12月に東京銀座ロータリークラブより支援金をいただきました。活動報告の場では、コロナ禍でも多くの方に活動を知っていただくことができ、新たな出会い、繋がりができました。

これからも継続して地道に活動を行っていきますので、引き続き、皆様方のご支援ならびにご協力をよろしくお願いします。（問合先：onemorechild@gmail.com）

東京銀座ロータリークラブで活動報告に参加した「世界青年の船」事業関係者（2021年12月）

留学生支援サポート「Restaurant IBARAKI」「Tea Ceremony」

イベントの背景

「コロナ禍で留学生が孤立しがちなのでIYEOの活動に参加できる機会はないか」海外の留学生の受入れを行っている一般財団法人日本国際協力センター(JICE)から留学生が在籍している都道府県青年国際交流機構（IYEO）に声がかかりました。対象となるのは日本政府の無償資金協力事業（*人材育成奨学計画：JDS）により招へいされた留学生で、コロナ禍でも日本に在住している方がいます。茨城県では筑波大学にアジアを中心として様々な国からの留学生が在籍していますが、留学が既に1年以上経過している学生もいる中で、日本文化に触れる機会はほぼなく、日本の学生との交流もあまりない様子でした。また、国費留学生は修士課程や博士課程の取得のために来日しており、語学習得が目的ではありません。そのため、日常生活では来日後に勉強を始めた日本語か、ジェスチャーでコミュニケーションをとっているそうです。

茨城県IYEOでこの活動の運営メンバーを募集したところ、6名の県内外の会員が集まりました。また、活動を進めるうちに2人加わり、現在は8人でIYEO自主活動サポート助成金制度（チャレンジファンド）の支援を受け、活動しています。

サポートを始める前に、まず留学生に現状のヒアリングを行いました。外に出る機会が少ないこと、日本人の友達がほぼいないこと、研究室には日本人学生がほぼいないことなどの現状を聞くことができました。また、茨城県IYEOで開催するイベントにはオンライン、対面を問わず参加したいという意見が上がりました。

*人材育成奨学計画：JDS
https://www.jica.go.jp/activities/schemes/grant_aid/summary/JDS.html

Restaurant IBARAKI
留学生とオンラインご飯でおはなし

緊急事態宣言下では対面のイベント開催が難しいと判断したため、オンラインのイベントを開催しました。イベントの名称Restaurant IBARAKIは、毎週水曜日のDinner timeと日曜日のLunch timeに開催することに由来しています。イベントではZoomを使用し、運営メンバーが自分のことを紹介したり、留学生が自国を紹介したりする発表や、家にあるお気に入りの物を紹介するコーナーを設けていました。特に人気だったのはブラウザから参加できるオンラインゲームです。言語に頼らず楽しめるゲームだったため、英語が苦手な参加者にも楽しんでいただけました。

イベントには留学生だけでなく、日本人の大学生や海外の青年にもご参加いただきました。留学生とIYEOの繋がりができただけでなく、日本人学生が英語に触れる機会の提供にもなりました。

Tea Ceremony

緊急事態宣言が解除されたことを受けて日本の文化の一つである茶道の体験イベントを開催しました。つくば市の茶道体験教室にご協力いただき、留学生7名の参加がありました。茶道の先生から日本の文化や思考と茶道の繋がりについて説明を受け、実際にお茶とお菓子を頂きました。留学生にとっては慣れない畳の上での正座でしたが、先生の話に興味を持ったようで多くの質問が上がりました。参加者からは良い体験になったという声が多く聞かれ、留学生が日本文化に触れる機会を提供することができました。

【IYEOの活動】

青少年国際交流事業事後活動推進大会（全国大会熊本大会／山形大会）

■令和2年度　全国大会熊本大会

令和2年12月5日（土）、web会議システムを利用して、青少年国際交事業事後活動推進大会、日本青年国際交流機構第36回全国大会が開催されました。「私たちそれぞれの365歩のマーチ ～熊本から未来へ、そして世界へ～」というテーマで、137名がオンラインでの大会に参加しました。

基調講演は「熊本生まれ、世界育ち。～7坪8席で創業した味千ラーメンの挑戦～」というタイトルで、味千拉麺チェーン本部重光産業株式会社 代表取締役副社長の重光悦枝氏によって行われました。昭和43年、7坪8席の小さなラーメン店からスタートした味千ラーメンは、現在、国内外におよそ850 店舗を展開。平成19年11月には、アメリカの経済誌『ビジネスウィーク』が毎年発表する「アジア成長企業ランキング」で、「味千ラーメン」の中国フランチャイズ企業である味千中国ホールディングスがトップ企業に選ばれました。現在では、中国だけでなく、東南アジアの国々や、北米、オーストラリアでもチェーン展開。熊本の味、のれん、伝統というものを大切にしつつ、固定観念に固執しない味づくりにも挑戦し、常に新しい発想をもって世界へと広がっています。

人と人とのつながりを大切にし、創業者の「世界中にラーメン大好き人間を創りたい」という思いを繋ぎ、地方都市、熊本に根付きつつ、グローバルな視点を持って挑み続ける味千ラーメンの取組や理念をお聞きし、参加者はそれぞれの活動において、困難を乗り越え羽ばたくヒントを得ることができました。

基調講演後には、趣向を凝らした六つの分科会、帰国報告会等が実施され、事後活動を更に充実させるための方策について考える機会となりました。

■令和3年度　全国大会山形大会

オンラインで基調講演をする奥田政行シェフ

令和3年9月19日（日）、web会議システムを利用して、青少年国際交事業事後活動推進大会、日本青年国際交流機構第37回全国大会が開催されました。「なせばなる　蒔けばなる　懐かしい未来に　志の種を蒔こう　～Grow Glow Globe～」というテーマで、193名が参加しました。

基調講演では、国内外でご活躍のイタリアンレストラン「アル・ケッチァーノ」オーナーシェフである奥田政行氏による「八方ふさがりからの未来論」と題するお話を聴講しました。奥田シェフの波乱万丈の人生に驚きつつも、生まれ育った土地や人々へ必ず恩返しするという生き方に感銘を受けました。自分が関わる人とその人の努力を大切にしていくことによって豊かな未来を築けることを学びました。

その後の「震災10年振り返り」では岩手県IYEO会長の高橋直幸氏と北海道・東北ブロック幹事の伊勢みゆき氏の活動報告を聞きました。未曾有の事態から復興活動を始め、未来の防災に至るまで体験に基づく非常に示唆に富んだお話でした。最後のワークショップは、オンライン上で初めて会う仲間と話し合って、メニューを作るという参加型のプログラムでした。オンライン上での資料共有や作成など、オンライン開催の可能性を大きく広げる企画で、若手の山形県実行委員の活躍が光っていました。

講演者の奥田政行シェフと山形大会実行委員のメンバー

コロナ禍のなか、オンラインという条件のもとではありましたが、地域の魅力に触れたり、社会貢献活動への新たなアイディアを得たりするなど、参加者にとって大変充実した大会となりました。

【IYEOの活動】 青少年国際交流を考える集い（ブロックイベント）

内閣府、地方公共団体等が実施した青少年国際交流事業の参加者や国際交流に関心のある方々が、事後活動の情報交換、地域、職場等における事後活動の促進について話し合うことを目的に、全国8ブロックに分かれてブロックイベントを開催し、近隣都道府県の連携を図っています。

■北信越ブロック（新潟県開催）

日時	令和3年10月17日（日）13時30分～17時
会場	オンライン（Zoom） MOYO Re:（実行委員） 新潟県新潟市中央区花園1丁目1-21　CoCoLo南館 1F
テーマ	**つながる　～Connect to the Future ME 未来のじぶん～** 新潟で世界との様々なつながりをつくり、活動している人との交流を通して、参加者に自身の未来について考え、今後の活動・挑戦のきっかけを得てもらう場を設けた。
参加者数	51名

■東海ブロック（三重県開催）

日時	令和3年12月12日（日）11時～15時30分（13時～14時 昼休憩）
会場	オンライン（Zoom）
テーマ	**「えらいときやけど、今の自分を知って、未来を描（えが）こに!!」** **～自分も周りも輝き育つ、心と体のエクササイズ～** 当イベントを通じて、参加者同士がつながり、自己理解と仲間への共感を深め手を取り合うことで、明るい未来を描けるようにすることをねらった。
参加者数	50名

■近畿ブロック（滋賀県開催）

日時	令和3年11月7日（日）13時～17時30分
会場	オンライン（Zoom）
テーマ	**「Luck is What Happens When Preparation Meets Opportunity** **～ピンチをチャンスに～」** 県内で活躍または滋賀県にゆかりのある方々をお招きし、様々な思いを抱えた方々に対して苦しい状況下でもそれを乗り越えるための解決策を模索するための機会になることを目指した。
参加者数	38名

■四国ブロック（高知県開催）

日時	令和３年８月21日（土）10時20分～16時55分
会場	オンライン（Zoom）
テーマ	**「青少年参加型の青少年国際交流及び青少年育成活動の創造と実現に求められる** **リーダーシップ・組織マネジメント・交流プログラム」** 青少年参加型の国際交流活動を行う地域の青少年国際交流団体やIYEO会員が直面しているボランティア組織のリーダーシップやマネジメント、青少年が求める交流コンテンツについて学ぶ機会とした。
参加者数	75名

■九州ブロック（佐賀県開催）

日時	令和３年10月30日（土）13時30分～18時45分
会場	オンライン（Zoom）
テーマ	**「LEAVE NO ONE BEHIND～だれひとり取り残さない～SAGA: Sustainable Action,** **Glocal Aspiration～佐賀のグローカルアクション～」** 佐賀県でグローカルに活動されている方々の事例を通して、一人一人が、それぞれの立ち位置でできることを考えていく一つのきっかけとした。
参加者数	49名

【IYEOの活動】 IYEO未来創造会議

あなたは、仕事以外で、何か社会に貢献したいと思ったことはありますか？

内閣府青年国際交流事業に参加して、その経験を何か社会に活かしたい。でも、今の仕事とはあまり関係ないし、自分一人でできるようなことじゃない。そんなとき、IYEOでは、ボランティア活動を通して、仲間を作ってあなたのやりたい活動が実現できるかもしれません。

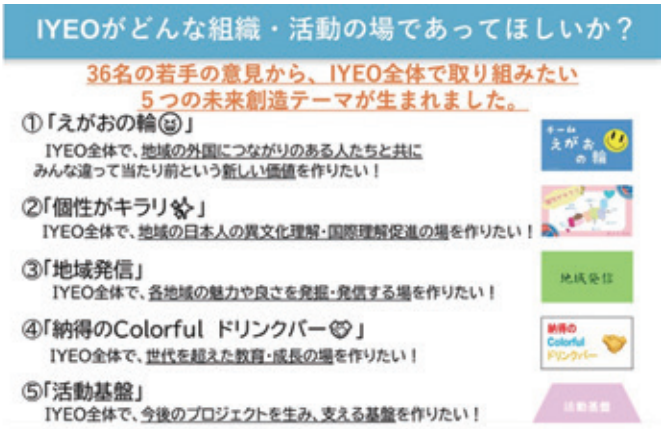
IYEOの持つ全国・海外の会員ネットワークで、都道府県や参加事業の枠を超えて、IYEOが貢献できる未来は何か？ それを議論するために、2021年、「IYEO未来創造会議」が創設されました。

IYEOのより良い未来を考えるきっかけづくりをする会議が「IYEO未来創造会議」です。

2021年３月に始まった「IYEO未来創造会議2021」には、熱意あふれる若手会員36名が集まりました。IYEO自体や各種スキルの学習から始まり、5月にはIYEO全体で取り組みたい五つの未来創造テーマが生まれました。そして、2021年８月、2025年という未来に向けてIYEO活動のあるべき姿を提言する「IYEO未来創造計画2025」を作り上げました。

出典：未来創造計画2025 p5

全国から集まった未来創造会議2021メンバー



出典：未来創造計画2025 p8

未来創造会議2021から生まれた活動テーマ

未来創造会議の進め方

未来創造会議は事前学習から段階（フェーズ）を追って進めました。

① 事前学習フェーズ(3/6〜4/30)

○あなたはどんな未来を創りたいか？　○そのためにIYEOをどうしたいか？
○「ボランティア」とは何か？　○「ボランティアだから楽しく」とは何か？
○ロジックモデル「どんな活動をすれば未来に近づくか?」
○あなたがリーダーとして大切にするもの　○あなたがメンバーとして大切にするもの

② 未来構想フェーズ（5/1〜5/28）

○事前学習の振返り・発表会
○未来構想テーマ決め
○ニーズとシーズの洗い出し・ロジックモデル

③ 課題整理フェーズ（5/29〜6/25）

○先進事例、課題のヒアリング、ロジックモデルの更新　○課題整理、SWOT分析など

④ 計画立案フェーズ（6/26〜7/24）

○未来創造計画2025（アクションプラン）作成着手　○IYEO役員との意見交換

⑤ 活動総括フェーズ（7/25〜8/9）

○ガントチャート着手　○IYEO全国推進会議報告(7/31)　○未来創造計画2025完成

少しずつ変わり始めた未来

未来創造計画2025で提言した「IYEOで実現したい未来」への第1歩が既に始まっています。
＜始まった新たな活動例（2021年12月現在）＞

- JICAと連携した、留学生を支援する行政官との交流イベント（笑顔の輪プロジェクト）
- 内閣府事業参加青年向け「段階的人材育成」（異文化理解プロジェクトなど）
- 地域の魅力に気づこう！「大人の社会科見学」（地域のいいとこみっけプロジェクト）
- IYEO版人生ゲーム〜内閣府事業が最高のキャリア教育〜（キャリア教育プロジェクト）
- ボランティア活動リクルート・広報イベント「IYEO Volunteer Fair」（活動基盤プロジェクトなど）
- 若手によるIYEO活動解説動画・SNS発信（未来創造会議2021インフルエンサーズ）

※詳細や最新情報は、未来創造会議ウェブサイトや未来創造計画をご覧ください。

未来創造会会議ウェブサイト

IYEOでなら、あなたのペースで、少しずつ社会に貢献できるかもしれない。

未来創造会議の活動・運営がきっかけで、未来創造計画2025完成から4か月後の2021年12月、IYEOの全国47都道府県の役員が集まる全国推進会議で、IYEOの活動に、都道府県軸、出身事業軸に加えて第3の軸「社会貢献軸」を組織として新たに設けることが決定しました。

また、内閣府の各青年国際交流事業の事前研修・事後研修と連携し、内閣府事業に参加する青年に、事業参加中から「事業終了後にこの経験をどう社会還元していくか」を考えてもらう、「段階的人材育成」の取組を未来創造会議メンバーが始めました。

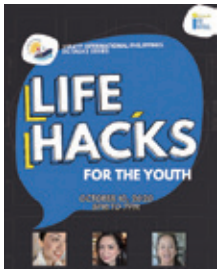
IYEOは参加する側も運営する側もボランティア。一般法人や企業ほど一度のインパクトは大きくないかもしれませんが、型にはまらない分、気持ちと仲間次第で、未来を少しずつ変えることができます。

未来創造会議はまだ始まったばかりの取組ですが、新設の「社会貢献軸」組織と共に、IYEO事後活動の新たな地平を開いていく予定です。

【国際的な活動】 SSEAYP インターナショナル（SI）各国の活動

「東南アジア青年の船」事業（SSEAYP）に参加した参加青年は、東南アジア各国及び日本において事後活動組織を作り、各国において各種の国際交流活動及び青少年健全育成活動等に寄与しています。各国の事後活動組織の国際ネットワークとして、SSEAYPインターナショナル（SI）が1987年に設立され、日本青年国際交流機構とブルネイ・カンボジア・インドネシア・マレーシア・ミャンマー・フィリピン・シンガポール・タイの事後活動組織、及び準会員であるラオス・ベトナムの事後活動組織により構成されています。

「東南アジア青年の船」事業各国事後活動組織の主な活動（2020年）

国名	主な活動内容
ブルネイ	・ 2020年3月、「マレーシア未来リーダー・グループ」の参加者に対して、ブルネイ国内でのホームステイをアレンジ。また、ブルネイの食や伝統衣装などの紹介プレゼンテーションを実施。 ・ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、空港やモスクなど、人手の必要な施設でのボランティア活動に参加。また、自宅待機中の方や高齢者に対して飲食物や生活必需品を届けるボランティア活動に参加。
カンボジア	・ 2020年、コンポンスプー州ピンポン小学校に、「SSEAYPインターナショナル・カンボジア図書館」を建設。（詳細はp.20を参照） ・ 新型コロナウイルス感染症のワクチン購入のためのファンドレイジング活動を行い、カンボジア政府に対してUSD4,000を寄付。
インドネシア	・ 2020年4～6月、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、遠隔地域の陽性者に飲食物を届け、医療従事者にマスクなどの必要物資を届ける活動を実施。物資の寄付を募るため、インドネシア全国各地の既参加青年のリユニオンや、バーチャル・ツアー（海外ツアー及び国内ツアー）をオンラインで開催。 ・ 2020年8月、「ASEAN Day」（8月8日）及びインドネシア独立記念日（8月17日）を記念したキャンペーンとして、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐための「SSEAYPマスク」を作成し、インドネシア全国各地及び海外へ配布。 ・ 2020年9月、社会貢献活動を行う既参加青年を資金面で支援するための「SIAGA（SSEAYPインドネシア既参加青年助成金制度）」の第2フェーズの募集を開始。
マレーシア	・ 2020年2月14～18日、北海道IYEO主催のスタディツアーを、クアラルンプールで受入れ。 ・ 2020年3月、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、マレーシア青年協議会（MYC）と共同で、クアラルンプールのホームレスや、警察官など最前線で働く人々に飲食物を届ける活動を実施。 ・ マレーシア人道支援団体（MHM）と共同で、サラワク州ミリの学校に、水道施設を建設。
ミャンマー	・ 第46回参加青年発案の事後活動プロジェクトとして、少年院を訪問し、寄付金を手渡すと共に、出院後にも夢を持ち続けて社会参加できるようなワークショップを実施。
フィリピン	・ 2020年10月10日、オンライン・ウェビナー「青少年のためのライフ・ハック」を開催。新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、特にメンタル・ヘルスにどう対応するか、オンライン教育・ストレス軽減・動物セラピーなどをテーマに、それぞれの分野の専門家である既参加青年3名が講師として登壇。 

国名	主な活動内容
シンガポール	・ 2020年10月7日、「SSEAYP Day」を記念して、オンライン・ヌードル・パーティを開催。シンガポール以外の既参加青年4名を含む、計42名が参加し、SSEAYPクイズなどを楽しみ、また、SSEAYPカップ・ヌードルTシャツを作成し、販売。
タイ	・ 2020年2月29日～3月1日、第46回参加青年発案の事後活動プロジェクト「一つの学校に一つの製品」をトラン県にて実施し、60名の高校生を対象に、起業家精神に関するワークショップ（オンライン・マーケティング、デザイン思考、資産管理、プレゼンテーション・スキルなど）を実施。
ラオス	・ 2020年10月、バドミントン・トーナメントを開催し、55名の既参加青年が参加。 ・ ラオス政府（ラオス人民革命青年同盟）が主催する「子ども・若者フェスティバル2020」で、既参加青年がSSEAYPの写真や動画などを紹介するブースを設営。
ベトナム	・ 2020年2月、旧正月（テト）中に、第46回参加青年発案の事後活動プロジェクトとして、タイグエン省の高齢者施設を訪問し、ギフトを届けると共に活動を実施。 ・ 2020年4月、第46回参加青年が中心となり、「東南アジア青年の船」事業の応募者増加のための事業紹介を行うオンライン・イベント「SSEAYPツアー」を開催。 ・ 2020年10月、第46回参加青年発案の事後活動プロジェクトとして、ハノイ市の児童養護施設を訪問し、ギフトを届けると共に活動を実施。

SSEAYPインターナショナル・カンボジア図書館

SSEAYPインターナショナル・カンボジアでは、コンポンスプー州ピンポン小学校に、「SSEAYPインターナショナル・カンボジア図書館」を建設しました。この小学校の以前の図書館は、1979年に完成した木造で、雨漏りがし、いつ天井が落ちてもおかしくない危険な状態でした。そのため、雨季には使用することができなくなっていました。SSEAYPインターナショナル・カンボジアが建設した新しい図書館は、2021年1月に完成し、8.5メートル×16メートルの大きさで、小学校の教室も備えた校舎となりました。

SSEAYPインターナショナル第32回総会（SIGA 2022 Japan）

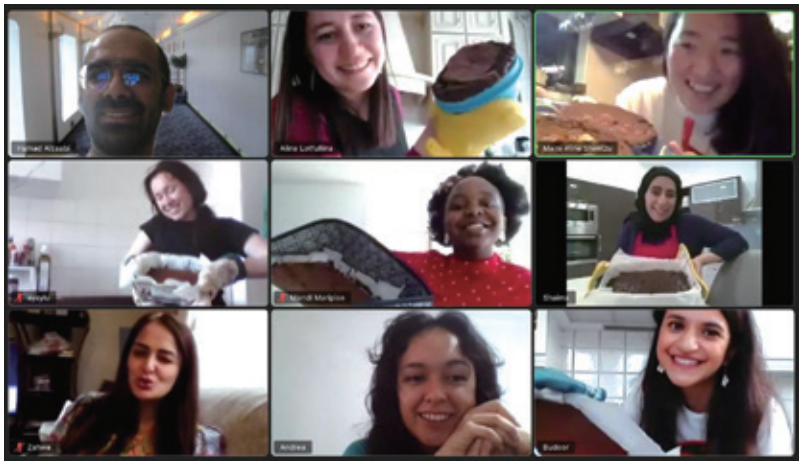
SSEAYPインターナショナル総会（SIGA）は、各国事後活動組織が、より効果的な社会活動の実践を目指して研鑽を積み、意見交換を行う場として、1988年から毎年1回、SI加盟各国事後活動組織の持ち回りで開催しています。第32回総会は、2020年3月にタイでの開催が計画されていましたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な感染拡大を受けて、開催が延期されました。

国境を越えた移動が制限される状況が続く中においても、各国における事後活動の取組を絶え間なく継続するため、今回、第32回総会を、令和4年3月13日（日）14:00～18:00（日本時間）に、オンラインで開催します。

第32回総会のテーマは、「Activate Our Future」。第28回・第36回「東南アジア青年の船」事業参加青年の吉野慶一氏（Dari K株式会社代表取締役）による基調講演と、全国のIYEOから募集したワークショップなどの分科会を予定しています。

【国際的な活動】SWYAA 各国の活動

昭和63年度（1988）に開始された「世界青年の船」事業の参加青年は令和元年度（2019）に実施された「世界青年の船」事業の参加青年を加えると、日本青年は計延べ3677人、外国青年は67か国で延べ4474人となっています。これら既参加青年たちは事業で得た貴重な体験をいかして、地域、職場、学校等において国際交流活動、青少年活動を活発に行うことが期待されているほか、日本と参加各国との間の友好親善の架け橋としての役割も期待されています。



ロシアとバーレーンのSWYAAで共同開催されたSWY BAKE DAY

各国の既参加青年の事後活動は、当初は基盤となる組織や資金、そして活動のノウハウが乏しく、積極的な活動展開が難しい状態でした。しかし「世界青年の船」事業が回数を重ねるとともに既参加青年の層も厚くなり、情報が蓄積されたことと、インターネットの普及も影響して、グローバル・ネットワークの確立と社会貢献活動の活発化に向けて、少しずつ前進するようになりました。寄港地、参加国共に固定されないという条件の下で、本格的な地球規模の活動を展開するための基盤の確立は難しい点もありましたが、国際連携組織の確立を目指して活動を推進した結果、SWYAA国際連盟（Ship for World Youth Alumni Association International）が設立されました。

SWYAA国際連盟は、「世界青年の船」事業、グローバルリーダー育成事業、「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」で培われた異文化理解、国際協力、国際平和の実現に向けてリーダーシップ精神を推進し、支援しています。参加国は、正式加盟28か国、準加盟7か国で、非加盟の関係国を加えると67か国の国々が連携しながら、様々な社会貢献活動を展開しています。

「世界青年の船」事業各国事後活動組織の主な活動（2020年）

国　名	事後活動組織名称	活動内容
オーストラリア連邦	SWY Australia	"World Peace Day Conference"の開催
バーレーン王国	Ship for World Youth Alumni Association Bahrain	献血活動、オンラインイベント"BAKE DAY"の共同開催
カナダ	SWY Canada	オンラインイベント"SWY Virtual Weekend"の主催
コスタリカ共和国	Ship for World Youth Alumni Association Costa Rica	海岸清掃活動を実施
インド	SWYAA-INDIA	スラムエリアでのSWYAA-Open Schoolの運営、マハトマ・ガンジーのリーダーシップに関する講演
日本国	日本青年国際交流機構（IYEO）	SWY WAVE広報活動に協力
メキシコ合衆国	SWYAA Mexico	SWY32訪問国活動に協力、オンラインワークショップの開催
ペルー共和国	SWYAA-PERU	献血活動、ペルー・インドオンライン青年会議の開催
ロシア連邦	SWYAA Russia	オンラインイベント"BAKE DAY"の共同開催
英国	SWY UK Alumni Association	女性のためのオンラインワークショップ開催
アメリカ合衆国	SWYAA USA	衣類の寄付、献血活動
南アフリカ共和国	RSA AA	農村女性作成のマスク購入のための寄付・ファンドレイジング

【国際的な活動】 中華人民共和国日本国大使館との連携

COVID-19による被害に対する募金

倪健政治部公使参事官（右）に支援金と目録を手渡す竹林義久中国派遣団同窓会会長（左）

中華人民共和国では、2019年12月以降に湖北省武漢市で新型コロナウイルス（COVID-19）による肺炎が発生し、被害が拡大し中国各地において道路の封鎖や外出規制なども行われ、人口約1100万人の武漢市は数週間にわたって封鎖されるなど、甚大な被害が発生しました。

こうした事態において、中国派遣団同窓会より日本青年国際交流機構（IYEO）に募金活動の要請があったことを受け「日本青年国際交流機構大規模災害支援積立金に関する内規(※)」に基づき、「新型コロナウイルス（COVID-19）による被害に対する募金」のために大規模災害支援積立金の適用をすることを決定しました。

左より、小田玲実IYEO国際担当幹事、竹林義久中国派遣団同窓会会長、本田温子IYEO副会長、倪健政治部公使参事官、相澤彩子運営委員

2020年3月27日、中国派遣団同窓会の竹林義久会長、本田温子IYEO副会長、小田玲実IYEO国際担当幹事、中国派遣団同窓会の相澤彩子運営委員の4名が中華人民共和国駐日本国大使館を訪問し、倪健政治部公使参事官に目録と支援金をお渡ししました。倪健参事官は「日本・中国青年親善交流」事業とも関わりが深く、2019年度は事前研修及び中国青年招へいの際に講演していただいています。

募金へのお礼

その後、2020年5月、中華人民共和国駐日本国大使館から、「新型コロナウイルスによる被害に対する募金」のお礼としてマスクをいただきました。また、IYEOの団体会員である認定NPO法人東京都日中友好協会からもマスクをいただき、計2500枚のマスクの寄贈を受けました。

マスクを受け取った江東園職員

IYEO事務局では、これらのマスクを有効活用するべく協議し、中国からいただいたマスクであることもふまえ、「日本・中国青年親善交流」事業の中国青年招へいの際などに協力いただいた「社会福祉法人江東園」にすべて寄贈しました。「最前線のヘルパーさんのマスクが不足していたので、たいそう喜ばれました」と江東園の職員からお礼状が届きました。

中国大使館から寄贈されたマスクに添付されたメッセージ「一衣帯水　同舟共済（和訳：（隣国同士）互いに手を取り合い、この困難を乗り越えましょう）」

IYEO会員の皆さまの中国への支援が、日本国内への支援に還元され、IYEOとしての中国とのつながりがいかされた結果となりました。

(※)大規模災害支援積立金とは？

「IYEO大規模災害支援積立金」は、2005年（平成17年）5月に発生したジャワ島中部沖地震の救援募金活動をしたことをきっかけに、2006年（平成18年）に制定された制度です。この制度は、IYEOと緊密な関係を有する国内外における機関、組織及び役員、会員等が、大規模な災害等によって罹災した際に、都道府県IYEOまたは各国の事後活動組織の要請を受けて、IYEOとして速やかな支援活動に取り組むことを目的として制定され、これまでに17件の実績があります。

中国派遣団同窓会、日韓交流連絡会議

中国派遣団同窓会

1979年度に始まった「日本・中国青年親善交流事業」に参加した青年により構成されています。1999年3月に京都で設立総会が開催され、IYEO内の組織として中国派遣団同窓会が発足しました。同窓会発足後、継続して活動してきましたが、円滑な活動を行うために令和元年度、会則の制定を目的とする起草委員会を立ち上げました。2020年1月に行われた中国派遣団同窓会総会で議案として提案され、承認されました。同年4月1日より会則が施行され、会長以下新役員体制での活動を行っています。

2年前の派遣団が幹事役となって年に一度の総会を開催し、中国青年の訪日時には、都内視察の同行や地方プログラムの受入などに積極的に取り組んできました。今年度は「日本・中国青年親善交流事業」のオンライン事業に協力し、ファシリテーター1名、運営サポーター5名全員が中国派遣団同窓会会員です。これにより、年度を越えた縦のつながりも強化され、中華全国青年連合会の協力も得て、中国とのかかわりも深まっています。

次回、中国派遣団同窓会総会は2022年3月6日（日）、オンライン（Zoom）にて開催される予定です。

日韓交流連絡会議

「日本・韓国青年親善交流事業」に参加した青年たちが、事業で得た日韓のきずなを再確認し、培った経験と国際感覚をいかし、日韓交流ネットワークを構築することを目的としています。2003年に有志が集まり、韓国ソウル市で「日本・韓国青年親善交流事業参加青年予備連絡会議」を開催し、日韓のネットワークを構築するための会議が実現可能なことを確信しました。2004年度から名称を「日韓交流連絡会議」とし、本会議ではネットワークを活用して、日韓友好や社会貢献に寄与してきました。

日韓交流連絡会議の主なプログラムは、①アクションプラン・トーク（日韓友好のための企画やアイディアを意見交換）、②レクリエーション、③開催地独自のプログラムで構成されており、日韓交流の更なる発展をめざしています。

次回、第18回「日韓交流連絡会議」は2022年3月12日（土）13時～18時、オンライン（Zoom）にて開催される予定です。

内閣府青年国際交流事業

くわしくはこちら URL: https://www.cao.go.jp/koryu/

内閣府青年国際交流 検索

内閣府青年国際交流事業 事後活動ニュース FY2020-2021

発 行 日： 2022年2月28日
発　　行： 内閣府青年国際交流担当室
〒100-8914 千代田区永田町1-6-1 中央合同庁舎8号館8階
TEL：03-6257-1434　FAX：03-3581-1609　URL：https://www.cao.go.jp/koryu/
編　　集： 一般財団法人青少年国際交流推進センター （Center for International Youth Exchange） URL: http://www.centerye.org/
編集協力： 日本青年国際交流機構　International Youth Exchange Organization of Japan（IYEO） URL: https://www.iyeo.or.jp/ja/